

## 兄弟をつまずかせないために

コリント人への手紙第一 8章 7-13節

### はじめに

コリント人への手紙第一を少しずつ学んでいます。8章からは偶像に献げた肉を食べて良いかどうかという問題が書かれています。

コリントの町は、非常に偶像礼拝が盛んな町でした。コリント教会のクリスチャンたちの多くも、以前は偶像を神と信じ、礼拝していたのです。コリントの町の偶像礼拝では、動物の犠牲が献げられました。そこでその動物の肉を食べることになっていたのです。しかし食べ切れなくて余った肉は、市場で普通に売られていたのです。

コリント教会のクリスチャンたちには、偶像に献げられた肉を食べるかどうかを迫られる機会がいくつかありました。一つは、偶像礼拝の神殿で結婚式や葬式、祭りなどの冠婚葬祭が行われる時です。彼らは、親戚などの冠婚葬祭が神殿で行われた時に、偶像に献げられた肉を使った料理が出されるので、それを食べて良いかどうか迷ったのです。また知り合いの家に食事に招待された時にも、偶像に献げられた肉の料理が出されることもあったのです。招待されているので、失礼のないようにしたいけれど、それを食べて良いかどうか彼らは迷ったのです。また偶像に献げられた肉は普通に市場で売られていたのです。彼らはそれを買って食べて良いかどうか迷ったのです。

コリント教会のクリスチャンの中には、偶像に献げられた肉を平気で食べる人たちと食べることに抵抗を感じる人たちがいたのです。

### 1. 正しい知識に基づいた人たちの権利と自由

偶像に献げられた肉を平気で食べる人たちは、ある知識に基づいて、確信をもって食べていました。それは、4節にあるように「**世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない**」という知識です。彼らは、偶像の神なんてそもそも実際には存在しないのだから、存在しない物に献げられた肉は、普通の肉と何も変わらない、たとえ食べても汚れるわけでもないし、清くなるわけでもない、だから何も気にせずに食べたらいのだから考えたのです。これは彼らの信仰の基づいた知識です。彼らの知識は確かに正しいものでした。確かに、私たちが信じている唯一の神様以外に神は存在しないし、偶像の神は実際には存在しません。

彼らは食物についても、8節で次のような確信を持っていました。「**私たちが神の御前に立たせるのは食物ではありません。食べなくても損にならないし、食べても得になりません**」。この知識も確かに正しいものでした。パウロは他の手紙でこのように言っています。「**食物は、信仰**

**があり、真理を知っている人々が感謝して受けるように、神が造られたものです。神が造られたものはすべて良いもので、感謝して受けるとき、捨てるべきものは何ありません」(1テモテ 4:3-4)。**

食物はすべて神様が造られた良いもので、捨てるべきものは何一つないのです。またイエス様も食物についてこう言われました。「**外から人に入って来るどんなものも、人を汚すことはできません。…人から出て来るもの、それが人を汚すのです」(マルコ 7:18、20)。**イエス様は、食物は人を汚さない、すべての食物はきよいとされました(マルコ 7:19)。

彼らの知識は確かに正しかったのです。唯一の神以外に神様は存在しないし、偶像の神は実際には存在しません。そして、すべての食物はきよいもので、人を汚すものではないのです。彼らはこの知識に基づいて、確信をもって偶像に献げられた肉を食べていたのです。

彼らは偶像に献げられた肉の問題から「自由」にされていました。彼らには、偶像に献げられた肉を食べる「**権利**」も、食べない「**権利**」もあったのです。彼らは、食べることにも、食べないことにも縛られなかったのです。彼らの信仰に基づいた知識が、彼らを「自由」にしたのです。

## **2. 知識や権利が弱い人たちをつまずかせ、滅ぼすこともある**

しかしパウロは、そのように知識に基づいて自由と権利を主張する彼らに、ある警告をしています。それは、9節にあるように、「**あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように気をつけなさい**」というものであり、11節にあるように、「**弱い人は、あなたの知識によって滅びることになります**」というものです。

パウロはここで、正しい知識に基づいた権利と自由が、必ずしも人を育て、教会を建て上げるわけではない、むしろそれらが、人をつまずかせることもあり得る、人を滅ぼすこともあり得るのだと言うのです。あなたが正しい知識に基づいた権利と自由を主張する陰で、誰かが傷ついているかもしれない、誰かが悩んでいるかもしれない、誰かが思い詰めているかもしれない、そのことを忘れてはならないと言うのです。

確かに正しい知識は必要です。しかし人間は、頭では理解していても、心がついていかないことが沢山あるのです。頭では分かっている、心が納得できていないということが沢山あるのです。物事には、正しい知識だけでは割り切れないことが沢山あるのです。

コリント教会のクリスチャンの中にも、唯一の神以外に神様は存在しないし、偶像の神は実際には存在しない、そんなことは分かっている！すべての食物はきよいもので、人を汚すものではない、それも分かっている！しかしついこの間まで、偶像を神と信じて、その神に献げた肉として信じて食べていた人たちにとっては、頭では理解していても、どうしても偶像に献げられた肉を単なる普通の肉だと割り切れない、それを食べることで良心が責められてしまう、悩む必要などないと分かっている、どうしても悩んでしまう、そういう人たちがいたのです。

パウロは、正しい知識に基づいて自分たちの権利と自由を主張して、平気で偶像に献げ

られた肉を食べる人たちに、皆が皆、あなたたちのようにすべてを割り切って考えられるわけではない、あなたたちの権利と自由によって、思い悩んでしまう人たちもいる、そういう人たちのことを決して忘れてはならないと言うのです。

愛の無い正しい知識は、時に人を傷つけることになります。正しい知識さえあれば、人は成長し、教会が建て上げられると考えるのは思い上がりです。パウロはこの手紙の中でこのように言います。「**たとえ私が預言の賜物を持ち、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、私は無に等しいのです**」(1コリント 13:2)。

### **3. キリストは、兄弟のために死んでくださった**

私たちは誰でも、自分たちの権利と自由を主張したくなります。自分の正しさを押し通そうとしたくなります。しかしパウロは 11 節で、このように言います。「**この兄弟のためにも、キリストは死んでくださったのです**」。パウロはここで、教会の兄弟姉妹をどのように見るべきかを教えています。私たちは、教会の兄弟姉妹を、キリストが命を懸けて愛してくださった人たちと見るべきです。キリストは確かに、教会の兄弟姉妹のひとりひとりために、死んでくださったと見るべきです。教会の兄弟姉妹は、キリストが命を懸けて愛するほど、尊い価値のある存在だと見るべきです。それゆえ、自分たちの正しさや権利と自由の主張によって、彼らが傷つくようなことがあってはならない、思い悩むようなことがあってはならない、彼らの痛みを決して小さな事として軽んじてはならない、なぜなら、彼らは、キリストが命を懸けて愛した尊い存在だからです。

教会は、キリストが命を懸けて愛してくださった人たちが集まっている共同体です。皆がキリストのゆえに尊く扱われるべき場所です。誰ひとり軽んじられてはなりません。教会こそ、自分が尊い存在であることを知ることができる場所であるべきです。教会こそ、健全な自尊心が養われる場所であるべきです。私たちが暮らしている社会は、必ずしも私たちを尊い存在として扱ってくれません。家庭も、学校も、職場も、国家も。しかし教会は、キリストのゆえに、ひとりひとりが尊い存在として扱われるべき場所です。それは、教会の人たちが皆良い人で、愛があるからではありません。そうではなく、キリストが私たちのために死に、私たちを命を懸けて愛してくださったからです。教会は、神の国を証ししなければなりません。神の国は、ひとりひとりがキリストに命をかけて愛された尊い存在として見られ、扱われる所ではないでしょうか。私たちがそのような交わりを作り上げていけば、人々は皆、教会にこそ神の国があるということを知ることができるのではないでしょうか。

### **4. 知識と権利を愛によって制御する**

パウロは 13 節で、「**食物が私の兄弟をつまづかせるのなら、兄弟をつまづかせないために、私は今後、決して肉を食べません**」と言っています。パウロは、正しい知識と権利と自由を持っ

ていました。しかしパウロは、それらに縛られてはいませんでした。パウロは愛のゆえに、自分の権利と自由を手放すことができたのです。パウロは決して、自分の権利と自由にしがみ付くことはしなかったのです。

教会には、信仰に基づいた正しい知識が必要です。しかし正しい知識だけでは、私たちは成長しないし、教会は建て上げられません。私たちが成長し、教会が建て上げられるためには、正しい知識と共に愛が必要です。

「愛」とは何でしょうか？愛とは、自分の当然の権利や自由を、相手のために喜んで手放すことではないでしょうか。私たちは、自分の正しさや権利や自由を主張して、それを押し通す時にあらゆる衝突が起こります。私たちの正しさや権利や自由の陰で、誰かが傷つき、思い悩んでしまうことがあります。私たちはそれらを小さな事として決して軽んじてはなりません。なぜなら、その人のためにキリストは死なれたのですから。キリストが命を懸けてその人を愛したのですから。

私たちは、自分の正しさや権利や自由を、愛によって制御しなければなりません。愛によってコントロールしなければなりません。自分の正しさや権利や自由に縛られない生き方こそ、本当の自由ではないでしょうか。愛に生きる生き方こそ、本当の自由ではないでしょうか。